

ジーンズの平家たち

小中陽太郎

インズの平家たち 小中陽太郎

毎日新聞社

ジーンズの平家たち

定価 九八〇円

一九七九年四月十日 印刷
一九七九年四月二十日 発行

著 者 小中陽太郎

編集人 吉田 掟二

発行人 高原 富保

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島
〒八〇二 北九州市小倉北区榭屋町
〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

ジーンズの平家たち
目次

ガラスの城	7
二百九十分の一	15
陰謀	30
コーシとシャカ	41
会議は逃げる	51
金の延べ棒	59
機動隊導入	73
女のさが	86
罠に落ちる	92
バージン・ダービー	104
梧桐の雫	112
大学サウナの怪	117
不正	131
四次元の暗闘	137

流刑小屋 146

怪文書 159

屋島美人のルーツ 168

「表」口入学 175

楽園喪失 186

特捜はじまる 195

追いつめられて 204

妙高三号 212

トカゲのシッポ 219

親不知 226

奥座敷の惨劇 235

蜃気楼のように 244

合掌づくり 249

装幀 水谷武司

ジーンズの平家たち

ガラスの城

高層ビルの頂きが春がすみとまじりあうあたりに夕陽が残っている。高い壁面を見上げる佐伯澄子の背筋にかすかな戦慄がはしった。

「まるで、立山の夕焼けのようだったちゃ……」

澄子は大都会の喧噪のなかで、ふるさとの山を思った。五つの高層ビルがそれぞれ高山の峯々と思える。白い壁は室堂の万年雪だ、基部が拡がり、先端に行くほどとがっているのが剣とすれば、ガラスが蒼く氷のように輝くのは雄山でもあろうか。

それなら、いま澄子が歩を進めているこのビルは何にあたるのだろうか、三角形で真白だから、白山ということにしておこうか。

「越中で立山、加賀では白山……」

澄子は郷里に近い、風の盆で有名な越中おわら節を思い出してちょっとはえんだ。雪国の女特有のふっくらした白い頬に小さなえくぼがこぼれ、やっと分けたばかりの前髪を春風がなぶっている。しかし、背筋を伸ばして高い空を見上げるシルエットは気持よく伸び、瞳は野性的な光を

放っている。その先のビルの角の赤い航空標識灯が明るさを増した。

澄子はジーンズのスラックスの腰のポケットから小さな紙きれをとり出した。さつき学生課でもらってきたばかりのアルバイト先の名が記されていた。

「ユー・スポーツセンター、新宿ビル」

こんなコンクリートの集積の中に、本当に二五メートルプールや体育館があるのだろうか。北陸から、この春、大学に入学して上京した彼女には、そもそも商売としての体育館がどんなものか見当もつかない。アルバイトの内容は、体育館（アスレチック・ジムとよぶらしい）で指導員の助手をつとめるということだが、それ以上は、学生課でもはっきりせず、なんでも、木登りの尻押しをするらしい、とはなはだたよりなかった。

お転婆ぶりがそのまま、アルバイトになるなんて、と気楽な気分で作ってきた澄子だが、この高層ビル群にはすっかり圧倒されてしまった。不安はビルの中に入るにおよんでいっそう増した。勤め帰りのOLやサラリーマンで賑わうビルは一つの町のような。地下にも中庭があり、花屋が出ている。ストックの花びらの間を抜け、大きなガラス戸を押すと、いきなり眼の前に、エメラルド色のプールが広がった。豊満な肢体の女性たちが水しぶきをあげている。

「まあ！ こんなところにプール！」

そのとき背後でやわらかな声があった。

「ご入会ですか」

テレビの化粧品のCMに出てくるような自信にあふれた若い男だ。

「えっ？ いえ、あの、アルバイトに」

男の眼に軽蔑の色がはしった。澄子はいそいで応募カードを渡した。

「富士見大学の社会学部ね」

無遠慮に澄子を見おろしていた視線が、腿から脚の線にきて、讃嘆の色にかわった。

「館内を見てもらいましょうか」

男は軽やかな身のこなしで、澄子の前にたった。コンクリートでかこまれた廊下を歩いて行くと、白い寝巻のようなシャツとパンツ姿の男女に行きあう。病院に似た雰囲気だが、もつと息がつまる。廊下の角から、壁に強く雑布でも叩きつけるような音がした。上から覗くと、熊の檻のような狭いコンクリートの空間で、二人の人間がボールを壁に向かってちからいっぱい打ち合っていた。

「イギリス生まれのスカッシュというゲームだね。テニスに似てますが、時間を決めてバレーボールのように得点をかぞえるのです」

「ずい分、せせこましいゲームですね」

「なにしろ、狭い場所しかなかった刑務所の囚人が考えたゲームですからね」

「まあ、囚人！」

澄子はやっと思いあたった。さっきからこは、何かに似ている、と思ひあぐねていたが、牢獄なんだ。

窓が全くない。どこもかしこもコンクリートの壁だ。空もない。それでいて、すべて小さく区切られている。おまけに入場した客たちは、自分の服を脱ぎ棄て、備えつけのサルマタのような下着とダブダブのTシャツのようなものを着なければならぬ。襟がなく、裾がダラリと外に出ているから、いよいよ囚人風だ。

「あのう、ここの会員になるには、どれくらいかかるのでしょうか」

澄子は思いきって聞いてみた。

「個人会員で、入会保証金、まあ会員の権利金ですね。これが五十万円です。それに入会金五万、年間会費三万六千円、そのかわり一回ごとの入場料は千二百円で済みます」

「でも権利金だけで五十万円も！」

「月二万四千円のローンもありますよ」

若い男は不動産屋のようなことをいった。そして、アスレチック・ジムへの扉を押した。体力づくりのための西洋式道場とでもいったらいいだろうか。しかしいきなりここに連れてこられたら、精神病院の休憩室か懲罰囚の訓練場とまちがえかねない。

鉄のハンゴをよじ登っている肥った男がいる。そうかと思うと、天井から伸びたゴムのロープに腰を結わえられて、手足をバタつかせている、いい若いものもいた。とりわけ

奇妙な印象をうけるのは、客たちが、たがいに口もきかず黙々とよじ登ったり、ぶら下ったりしていることである。まるで啞の世界。

室内に目を走らせて行くと、奇妙な装置が目に入った。

人力エレベーターと書いてある。ふつうのエレベーターとちがうのは、エレベーターのロープを曳くのが箱の中にいる人間自体だということだ。ロープの先に滑車がある。何のことはない、中の男は苦勞して自分で自分をもちあげているのだ。

「まるで檻に捕えられているチンパンジーだっちゃ」

そのチンパンジーの顔に見おぼえがあった。

大学の新生観迎会で講演した木ノ宮講師ではないか。

「先生！」

澄子は思わず驚きの声をあげていた。

男性は、下着一枚のところを、それも股の間から急に女の声で呼びかけられると、誰でもあるところに手をやる。

わが講師木ノ宮秀彦もまたそうした。とたんに檻を引き上げていたロープが手から放れ、人力エレベーターの降下が始まった。

「ヤヤヤッ！」

木ノ宮は哀れな声を出した。背の低いのが難だが、なかなかの洒落者で、広い額に黒髪が乱れるところが、何ともシビレルと、騒ぐ女子学生も多いそうだ。しかし、アスレチック・ジムでトレーニング中のハダカの木ノ宮は下腹が

丸く突き出、ご自慢の長めの髪も汗で乱れて、それこそ不意を打たれたチータといったところだ。澄子が笑いを噛み殺しているとき、木ノ宮は肩で息をしながら、檻から這い出してきた。

そのとたん、背後で、

「ガシャン！ ガシャ、ガシャン」

とてつもない音がした。ジムの中の客たちがハッと身を凍らせた。

「キャー」

「地震か」

バラバラとこまかなガラスの破片が地下の体操室に降り注ぐ。

「非常口はどこだ」

密閉された空間だけに恐怖がつのった。入口に殺到する女性客。揺れ戻しのようにまた崩れかかるガラス。

「先生！ こわいッ」

澄子も、思わず、眼の前の裸同然の木ノ宮講師の腕にとりすがっていた。男の汗の匂いが澄子の鼻孔をついた。木ノ宮も真蒼になって澄子をきつく抱いた。その腕がこきざみに揺れている。

ガラスの破片の中から、三十代の痩せた男が蒼ざめてよろめき出た。

澄子を案内していた若い男が駆けよって、

「お怪我はございませんか」

「あの、あの、スイマセン、スイマセン」
痩せた男は今にも泣き出しそうである。

「どうなさって」

「ゴルフのスイングを矯正する装置があるでしょう」

「ハア、シュミレーターでございますか」

「ぼくが、クラブを振ったら、掌が汗で濡れていてスポツと抜けたんです。正面のガラスがこっばみじんに、あの、ぼく、いったいどうしたら……」

「え、あれは一台八百万円」

今度は係の男の方が蒼ざめた。

澄子はおかしいやら気の毒やらで笑いを悟られぬように下を向いた。

しかし、気がつくとき、木ノ宮の汗で、澄子の前髪が濡れている。前髪が二、三本、胸に張りついたまま残った。頬に伝う汗に木ノ宮のものがまじっている。Ｔシャツの下の方、乳房が男の胸に押されている。それに気がつくとき澄子は思わず顔が火照った。

「すみません」

あわてて、からだを引き放すと、木ノ宮は

「いいんだよ」

と少し残念そうな顔をした。

この騒ぎで、見学はそこまですべてなくなってしまった。受付に戻り、仕事の方は、四時から十時までで、時給八百円ときまった。フロントで注意を聞いているところへ、木ノ宮が

あらわれた。ロッカー・ルームから出て来た木ノ宮は、すっかり瀟洒なスタイルに戻っている。ページュのズボンに黒のブレザー、スポーツシャツの襟が鮮かだ。カウンターの男は、木ノ宮の姿をみると、

「いかがでしたか、トレーニングの効果は」

「ああ、五百グラム減量したよ」

「それは、ようございました」

澄子は、体操室の人力エレベーターの中で波うっていた木ノ宮の太鼓腹を思い起こして可笑しくて仕方がない。あれから五百グラム減っても変り映えないのじゃないかしら。

澄子が思い出し笑いをしているとき、木ノ宮は澄子に向かって、

「どう一杯つき合いたまえよ。一汗かいたら、のどが乾いた」

もうドアに向かっていっている。

花屋の前から地上に出ると、あたりはすっかり夕闇が迫り、春の宵の底に恋人たちの淡いかげがにじんできた。

木ノ宮秀彦は大またに隣のホテルのビルに入って行く。

有無を言わせぬ調子である。

フロントで鍵を受けとり、エレベーターの前になると木ノ宮は思いついたように、

「だが、今の時間、バーは観光客で混んでいるなあ。いっそ、ぼくのへやでルームサービスをとろう」

「だって、先生、女の子がホテルの部屋なんて……」

「ナニ、この時間なら、部屋に女の子が来てもおかしくないさ」

そういうと、もう、エレベーターのボタンを押している。

部屋に入ると、左手にベッドが二つならんでいた。反対側の壁ぎわに、つくりつけの机がある。その上に大学ノートが拡げてあった。

「先生はこういうところでお仕事をするんですか」

「いや、春休みの間に片づいているはずの原稿が出来上らなくてね、それでここに」

澄子にはどうしても、ベッドが気になる。澄子になるべく、ベッドを見ないようにして、窓際に立った。すぐ下は公園らしく灯影もない。暗いダムでも見おろすような気がした。

「こんなところで仕事なんていいですね」

「いや、味気ないものだ。たまには、キミみたいな若い女の子の生気を吸わなくてはね」

「えっ」

と少し身を固くして、

「私、こんな高いところのぼったのはじめてです。高いところのぼると、胸がしめつけられるような気がするのですね」

澄子は不安になってきた。

「そうだ、カンパリを頼む、ソーダもだ。それからウイス

キーも持ってきてもらおうか。氷はバケットで」

木ノ宮は、電話で飲物を注文している。

澄子は、先生だからって、安易にホテルの部屋までついてくるのではなかった、と後悔した。しかし、立ち去るきかけもつかめないのだ。

木ノ宮はブレザーをベッドの上に抛り出すと、窓際の椅子にすわった。

澄子は立ったままできいた。

「先生は、よく、ああいうところでトレーニングなさるんですか」

「ああ、肉体を鍛えておかないと君のような若い女を襲えないからね」

「ここで襲うのですか、いつも」とベッドを見た。

「狼は場所を選ばずさ」

「先生は、若い女を襲うために、アスレチック・ジムでトレーニングなさっているのですか」

澄子は壁ぎわに身をすさった。木ノ宮秀彦は立ち上ってホテルの一室をゆっくり歩いている。

「雄は、雌を征服するために励む、体育の根本は性衝動だ。それが証拠に、どの国民でも人気のあるスポーツは同時に性的ショーでもある。相撲はハダカの肉体、とりわけ腰から、股間にかけて美々しく飾り立てているじゃないか。アメリカン・フットボールも肩や腿をプロテクターで誇張し

ている。闘牛の剣は、男性の象徴だろう。フェンシングや剣道には、そういう性的意味があるのだ」

そういつて胸をそらした。

「女子体操を見たまえ、これはまぎれもなく肉体的魅力を誇示するためのものではない。とりわけ、出産の安定感が観客を安心させる」

「出産ですって？」

「そうさ、開脚、跳躍、どれも出産のために最も重要な筋肉だからな。フィギュアー・スケートにいたっては衣装ひとつとっても並のストリップなどかなわないではないか」

「じゃ、スキーもですか、ジャンプはあんなに清純ではないですか」

と澄子は、雪国出身らしい反論をした。

「ハハハ、あれこそ、性だよ。ピュンと空中に舞い上がるだろう。きみネ、人間の男性の肉体の中で重力に抗して立ち上る場所が一個所だけある、どこだか知っているかい」

「さあ……」

「わからなかなあ。心理学者にいわせると、空を飛ぶことこそ人間の男のあくなき夢なのだ。どこかわからんか。重力にさからう前にズボンにさからったりするが」

「まあ、いや、先生ったら」

「ハハハ、だからこういう高層ビルにのぼると、男は欲望でグラツキ、女は誘惑に抵抗できなくなるのだ」

そういうえば、澄子のからだは宙に浮くような気分だ。

狭い空間の大半をベッドが占領している。

いくら先生とはいえ、知り合ったばかりの男性と二人きりで、こんなところにいると息がつまりそうだ。今のうちに逃げてしまおうか、と思うのだが、先生だ、と思うとそれもしない。

「ま、座りなさい」

「でも」

どまたベッドカバーをみた。

そこへ飲物が来た。メイドがサイドテーブルの上に赤い液体や炭酸をならべた。出て行くときに、澄子と同じ年頃の若い女の子がちらと澄子の顔をうかがった。それが非難の表情に思えて澄子はドキリとした。

木ノ宮はグラスに赤い液体を注ぎそれを澄子に渡しながらいった。

「君の郷里はどこなの」

「私、富山県の山奥の五箇山^{ごかやま}というところだ」

「五箇山ねえ、ああ、平家の落人の里といわれるところだな」

「御存知ですか、今ではダムもできて、交通も前ほど不便じゃないんですよ。でも少し前までは谷にかかった籠^{かご}の渡しなんていうものがあつたんです」

そこまでいって澄子は小さく笑った。

「何がおかしいの？」

「谷にロープを張って乗る人が自分で手操るんです。先生

がジムでトレーニングしていた人力エレベーターそっくり。五箇山ではタダでやるのにここでは高いお金を払って自分で自分をもち上げるんですもの」

「ハハハ」

緊張がいくらかほぐれた。

すると突然、木ノ宮が立ち上って天井の明りを消した。

ベッドの脇のスモールランプだけになると部屋全体が暗い空間をただよっている気がする。

澄子のからだも、中から火照り、足元がゆらぐようだ。

木ノ宮がガラスをテーブルに置いた。

部屋の四隅は薄暗がり、沈み、わずかに、ベッドの枕もとの明りがオレンジ色の光をベッドカバーの上に投げかけている。木ノ宮も、もう口を開かない。

暗がりの中を木ノ宮のスポーツシャツの襟が近づいてくる。澄子は息苦しくなってきた。このまま、表にとび出したい。

澄子のジーンズのジャケットの下でTシャツが小さきみに揺れた。鼓動が早くなる。

早くドアを開けて逃げ出さなければ、と思うのだが、足が動かない。

それまでゆったりした身のこなしだった木ノ宮が、いきなり両手で澄子の両腕をとった。澄子は右手には飲みさしのカンパリ酒のグラスを後生大事に支えていて身動きできない。

「アッ」

と思つて顎を引いたときには、木ノ宮の唇がすばやく澄子の唇をかすめていた。

唇にキュッと熱いものを突きつけられたような気がした。鋭い刃物で肉体の一部をこそぎ落とされたようにどきっとした。

「セ、先生」

ほんのかすかな接触なのに頭の芯にまで電気のようなものが走った。そして、あとに、かすかにリキュールと男の匂いがたどった。

だが、十八歳の澄子は、本能的に男の匂いを避けた。それは熱い湯に触れた幼児が思わず手を引っこめるさまに似ている。澄子は身を硬くして壁を背にしたまま、両手を壁にあてた。

その姿があまり緊張しているので木ノ宮の方が驚いている。

「なんだ、君、キスぐらいで」

「だって」

と澄子は涙声になった。

「先生！ 東京の学生はお逢いして一日目の先生にすぐキスさせるんですか」

と澄子はふるえる声で抗議した。

「こりゃ手きびしいな」

と木ノ宮は弱った顔をした。

「ほくだって、それほどの色魔じゃないさ。ただね、さつき、アスレチック・ジムでぼくのからだの中にとびこんできたろう。それで何となく……」

そういわれると、ゴルフ練習機のガラスがコッパミジンになって思わず木ノ宮にすがりついたときの木ノ宮の汗の感覚が甦った。そうすると、恥ずかしさと同時に甘ずっぱい感情におおわれた。

しかし、澄子はその感触を追い払うように、

「先生は、何となく、だけで女の子にキスするんですか」

木ノ宮はますます情けなさそうな顔になった。

「こりゃ、まいった。じゃ、正直にいおう。君は清純そうで、それでいて、コケティッシュなところがある。それに抵抗できなかったんだ」

「でも、だからって」

澄子は急に悲しくなってきた。何だか、自分が田舎ものだと思って軽く見られたような気がした。

くちづけは、もつと心と心が近より、そして、ある夕ぐれ、美しい草原でかわすものだ決めていた。それが三十分前にアスレチック・ジムで見かけた教師についてきて、ホテルの一室でいきなりキスされるなんて。何の準備もできていない。

澄子の心の中には怒りに似たものがうごめいた。悲しみかもしれない。

しかし、不思議なことに、ほっとしたような安堵の気持

もあった。彼女は、くちづけの直前の緊張にたえられなくなっていたのだ。

これで、もつと気楽に話せるのじゃないかしら。澄子は、十八歳という自分の肉体と心を少し怖いものにした。

ホテルのこちら側は新しく開けた所でビル予定地や公園のため灯りが少ない。十二社温泉という赤いネオンがかすかに見えた。

はるか西の方にうっすらと山なみが残っている。その上に台形の切絵のような山が見えた。

「あれは、なんですか」

「富士だよ」

「え、あれが富士山、じゃあ、五箇山はもつともつと向うですね」